

出エジプト記 19：1－8a

出エジプト記には、エジプトで奴隷とされ、苦しめられていたイスラエルの民を救うために、神さまがモーセを遣わし、数々の御業によってエジプトからの解放を与えてくださったこと、そしてエジプトを出たイスラエルの民が、神さまが約束してくださった地に向かって荒れ野を旅していくことが語られています。19章では、シナイ山において神さまがイスラエルの民と契約を結んでくださった出来事が記されています。このシナイにおける契約こそ、出エジプト記の中心であり、また旧新約聖書全体を貫く中核でもあります。ここには、神さまの恵みと、それに対する教会のなすべき応答が語られています。「私にとっての救いとは何か」「教会はどのように生きるのか」、その核となる部分が教えられています。

5節には「今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間においてわたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである」とあります。ここには、神さまがイスラエルの民と契約を結んでくださることの目的が示されています。イスラエルの民が神さまにとって宝となる、宝物のように尊い大事な民となる、それがこの契約の目的です。神さまは、イスラエルの民をご自分の宝の民とするために、契約を結ぼうとしておられるのです。

では、「神さまの宝の民」となる、とはどういうことなのでしょう。6節に「あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」とあります。つまり、神さまの宝である民とは、祭司の王国、聖なる国民のことだと言うのです。

聖書で言われている祭司とは、神さまと人々との間に立ってとりなしをし、人々が神さまと善い交わりを持って生きることができるようにする人のことです。その祭司は聖なる者でなければなりません。けれども、この聖なる者というのは、清く正しい人という意味ではありません。そうではなく、神さまによって選ばれ、神さまのものとされている人ということです。すなわち、神さまが選び、神さまによって聖なる者とされた人が、人々と神さまとの間をとりなす祭司となるのです。ですから、ここにおいてイスラエルの民は、神さまに選ばれ、神さまの民とされ、聖なる国民となり、そして祭司の王国となるのです。

では、イスラエルの民は誰のための祭司となるのでしょうか。それは、世の全ての人々のための祭司です。イスラエルが、神さまとの契約によって神の民とされるというのは、他の全ての人々、民族のためにとりなしをし、その人々が神さまとの善い関係の中に生きることができるように祭司としての務めを果すためなのです。そういう務めを果すことにおいて、イスラエルは神さまの宝の民となるのです。

ですから、このことを、神さまがイスラエルとだけ特別な関係を結んでくださるとか、イスラエルの民だけが神さまの救いの恵みにあずかって、その他の人々は滅ぼされるとか、放っておかれるという意味に取ってしまうと間違った選民意識というものを持ってしまうことになります。

神さまが契約によってご自分の民を興し、その民を用いて救いの御業を行なってくださいるのは、全ての人々のためなのです。選ばれた民、神の民は、自分たちが救われるために選ばれただけではなく、すべての人々が神さまの救いにあずかるために、またそのことを願っておられる神さまの御心を行なうために選ばれたのです。このことは、創世記 12 章で神さまがアブラハムを選び、彼を神の民の先祖としてくださったところにも語られていました。神さまはアブラハムに「あなたは祝福の源」となると告げ、「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」と約束されたのです。それゆえに、アブラハムとその子孫によって、神さまの祝福が地上の全ての民に及んでいくのです。

このことは、主イエス・キリストによる新しい契約の恵みにあずかり、新しい神の民、新しいイスラエルとされている私たちの教会にも当てはまります。

私たちが救いにあずかり、神の民とされる根拠は私たちの中には何もありません。私たちはそれに相応しい清さや正しさを持っているわけではありません。ただ神さまが、私たちのことを憐れんでくださった。キリストの十字架によって私たちに罪の赦しを与えてくださり、またキリストの復活によって私たちにも、神さまの子どもとして生きる新しい命を与えてくださった。この神さまの御業によって、私たちは神のもとに導かれて「宝の民」とされるのです。けれども、それは教会に連なる者が救われるためというだけでなく、教会を通して、主イエス・キリストによる救いが多くの人々に宣べ伝えられ、一人でも多くの人がそれにあずかっていくためなのです。

どうか私たちの教会が、また私たちが、この恵みにあずかる祭司の王国、聖なる国民として、人々のためにとりなしの働きをする祭司としての使命を担っていくことが出来るようにと、その祈りをますます厚くしてまいりたいと願います。